



第 37 号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町 3-100

〒447-0087：TEL. 0566-41-8522

：FAX. 0566-41-7761

梅原猛名誉村長寄稿

「講演について」

私は光栄にも哲学たいけん村無我苑の名誉村長を務めているが、その主な役目は碧南市で毎年一回講演を行うことである。実は昨年夏、ある京都の寺院主催の暁天講座で行った講演の最中、頭が少々混乱して、まとまりのない話になってしまった。私は元来、講演をするのが得意であり好きであったが、それ以来、講演を行うことに恐怖を感じるようになった。

私は学者であるとともに作家でもあるが、すぐれた作家には講演の苦手な人が多い。たとえば遠藤周作である。あるとき彼は一時間と約束されていた講演を十分足らずで終えてすたすと帰ってしまったらしい。また、苦手な講演を例の狐狸庵山人流の悪ふざけによって紛らわせようとしたのであろうか。ある講演会で、彼は聴衆には見えないようにスカートをはいていたという。

そのような作家のなかで、水上勉はまさに泣ける話をする名人であった。彼は、自己の愛欲の体験を滔々と語るあの宇野浩二の弟子であるが、彼自身もまた語りの達人であった。それゆえ、水上とは一緒に講演しないほうがよいといわれていた。どんなに上手く講演しても水上にすっきり食われてしまうからである。

それにもかかわらず、かつて私はある地方都市で水上と二人で講演を行った。そのとき彼は、愛人である京都のバーの美人ママを伴っていた。講演会で私は彼の前座を上手く務めたつもりであったが、その後の彼のみごとな語りには敗残の惨めさを味わった。

水上はかつての貧乏時代に自分がいかに苦勞したかを語った。福井県大飯郡の棺桶職人の家に生まれ、相国寺の小僧に出され、辛い修行をしたことや毎日まじいお粥しか食べられなかったことなどを涙ながらに語るののである。満場の聴衆は水上に共感し、もらい泣きした。愛人を連れて来ていた水上は、前夜さんさん性の楽しみに耽つたはずである。その翌日に、何食わぬ顔で若き日の苦勞話をする水上に私は天才を感じた。

私は、講演を行うときには必ずレジュメを作ることにしているが、それが講演の下準備になるのである。しかし実際の講演はレジュメに書かれたことを話すだけでは不十分であり、そこにアドリブの私見やジョークを織り込まねばならない。そのようにして講演が上手くできたとき、私は一つの芸術作品を完成させたかのよような満足感を覚える。

すぐれた批評家であった小林秀雄は講演の名人であった。彼は思いもつかないような逆説で聴衆を驚かせ、人生は理解したいものであることを説いた。私は二、三度、小林の講演を聴いたことがあり、内容はいま一つ理解できなかったものの、たしかに人生というものは不思議なもので、文学は魅力あるものだと思わざるを得なかった。

また瀬戸内寂聴も講演の名人であることは疑いないが、特に講演後に行われる聴衆との質疑応答がすばらしい。彼女は悩む女性の質問に答えて、若き日に複数の男性と同時に恋愛していた自身の体験を臆面もなく語るのである。そして、通つてくる男たちが鉢合わせしないよう十分配慮しなければならぬが、もし鉢合わせしたときはどうすべきかということなど懇切丁寧に教える。寂聴の答えを聞いて、悩んでいた女性は安心し、罪障感などという余計なものを吹き飛ばしてしまふ。寂聴の講話はまさに弱き女性を救う仏の慈悲であらう。

今年も碧南での講演を見合わせることにした私はここで珍しく講演をめぐるところ感を述べた。来年は老残の身に鞭打って講演をしたいと思っている。

長月の会

◆出演◆
 青の琴星(二胡)：仲島千創氏、シン
 セサイザー：小夜湖氏、ギター：
 紫月氏)



平成二十七年九月二十六日、哲学たいけん村無我苑瞑想回廊中庭にて、「長月の会」を開催しました。今回は、青の琴星の皆様をお迎えして、「見上げてごらん夜の星を」、「ムーンライト・セレナーデ」、「星に願いを」など秋の夜長にふさわしい曲を演奏していただきました。

当日は天候が不安でしたが、夜には月が顔を出し、さわやかな風も吹きつけてとても幻想的なコンサートでした。

出演者プロフィール

仲島 千創 (二胡)

様々なジャンルの音楽に通じた音楽家。洋楽・邦楽両方の特性を生かした音楽作りを主とし、音楽のジャンルを超えた演奏活動を目指している。二胡・胡弓奏者としては、伝統的な日本の胡弓と中国の二胡で、古典はもとより童謡・唱歌・民謡・民族音楽・尺八曲・ライトクラシック・ポピュラーなど、様々な音楽を演奏する。キーボード・ギターとのユニットを組み、ライブハウス・レストランなどのコンサートで哀愁のある響きで聴衆を魅了し、各地で好評を博している。

小夜湖 (シンセサイザー)

幼少より故小俣久氏に師事。大学時代は金城学院モダンアンサンブルに所属し、バンドマスターを務める。その後、全国学生軽音楽連盟のコンボ委員を務め、大学卒業後はヤマハピアノ・エレクトーン教室の講師を経て、仲島千創とのユニット「青の琴星」、そして、現在「上海ムーン」ではキーボードとして活動中。

紫月 (ギター)

今までのギターの演奏概念を変える、叩きを用いた奏法で、インターネット上の動画サイトにて既存曲を独自のギターアレンジ等を加えて配信している。他、YouTubeモデルとしても活動。ビジュアルにも特逸しており、独特のギターパフォーマンスが動画サイトで話題を呼んでいる。

怪談落語会

◆出演◆
 微笑亭さん太氏
 (ほほえみていさんた)

平成二十七年八月二十九日、哲学たいけん村無我苑研修道場にて、「怪談落語会」を開催しました。夏の夜には怪談が付き物ということで今年度初めての開催でしたが、古典怪談、創作怪談を織り交ぜたおもしろくてこわい話が繰り広げられました。蒸し暑くて過ごしにくい夏の夜が続いていましたが、こわい話を聞いてひんやりできるひとときでした。



微笑亭さん太氏プロフィール

愛知大学在学中は落語研究会に所属し、卒業後、豊橋落語天狗連に参加。平成十六年、春風亭小朝、笑福亭鶴瓶、立川志の輔、春風亭昇太、林家正蔵、柳家花緑、からなる『六人の会』主催、『第一回・全国落語台本コンクール』にて、千四十八本の新作落語台本の中から、自作『身投げ橋』が最優秀賞を獲得。以来、春風亭小朝、春風亭昇太、立川志の輔、林家正蔵、林家木久蔵、林家三平、桂かい枝など、プロの落語家に定期的に落語台本を提供する作家活動のかたわら、自らも年間二百回に及ぶ高座に上がり続け、平成二十一年八月には、大阪池田市で行われた『社会人落語日本一決定戦』において、三百六十二名の社会人落語家の中から、三位入賞を果たし、翌年も奨励賞を受賞。唯一の、二年連続入賞者である。

近年は『悪質商法撃退落語』、『振り込め詐欺撃退落語』、『認知症落語』、『納税推奨落語』、『子育て応援落語』、『中高年応援落語』、『交通安全推奨落語』、『商店街落語』、『投票呼びかけ落語』など、テーマに応じた創作落語を作って演じ、その啓発に一役買っている。



「春日井保裕展」を開催中

哲学たいけん村無我苑瞑想回廊では、現在小原和紙工芸作家の春日井保裕氏の作品展を開催中です。

◆会期 四月三日（日）まで

◆時間 午前九時から午後五時まで

◆休苑日 月曜日

※ただし、三月二十一日は開苑、二十二日は休苑します。

◆場所 哲学たいけん村無我苑 瞑想回廊

◆観覧 無料

春日井保裕氏プロフィール

豊田市在住の和紙工芸作家。藤井達吉に学んだ、春日井正義の三男として生まれる。一九七七年、大阪芸術大学絵画科卒業、和紙工芸家として活動を始める。一九八四年、天皇后兩陛下に日展出品作「流」（一九八二年制作）の作品解説をする。また、碧南市市制四十周年を記念して作られた「碧南市史第四巻」（一九九八年発行）の表紙を手がける。数多くの個展を開催して、日展入選をはじめ様々な賞を受賞して現在に至る。

小原和紙とは

小原和紙工芸は、和紙原料のコウゾを染色し、それを絵具代わりに、絵模様を漉き込んでゆく美術工芸品です。

涛々庵茶会・三曲定期演奏

涛々庵茶会は無我苑の市民茶室涛々庵（とうとうあん）を使用した市民茶会です。毎月席主によってそれぞれに創意工夫がなされ、華やかな茶会となっております。また、茶会に華を添える箏、三弦、尺八による三曲の定期演奏も研修道場安吾館にて行っています。

平成二十八年度の涛々庵茶会は、毎月第四日曜日に開催します。ただし、平成二十八年度は十二月の涛々庵茶会は開催しません、三曲定期演奏のみ十二月の

第三日曜日に開催します。

料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで（立礼茶席は十六時まで）です。三曲の演奏はお茶会にあわせ随時観覧無料で行っています。

お茶会の作法についてご存知ない方もお気軽にご参加いただけます。また、三曲の演奏はお茶会に参加しない方もお聞きいただくことができます。是非、一度涛々庵茶会の雰囲気をお楽しみください。

平成 28 年度涛々庵茶会・三曲定期演奏予定表

月 日	涛々庵茶会		三曲演奏出演団体
	席主	流派	
4月24日	小笠原美美（宗文）	久田流	尺八 川村柔山グループ
5月22日	鈴木なみ江（宗江）	裏千家	鈴木祥子社中
6月26日	神谷美枝子（宗美）	表千家	若草会
7月24日	澤田 教子（宗教）	表千家	絲音の会
8月28日	永井いく子（宗郁）	裏千家	神宮弘美社中
9月25日	杉浦 伸子（宗伸）	裏千家	鈴木祥子社中
10月23日	小林ミサ子（宗実）	裏千家	絲音の会
11月27日	杉浦 時子（宗時）	宗徧流	山本加代子社中
12月18日	開催しません		鈴木祥子社中
平成 29 年 1月22日	永井いく子（宗郁）	裏千家	若草会
2月26日	杉浦みどり（宗翠）	裏千家	鈴木祥子社中
3月26日	小島 和美（宗美）	裏千家	絲音の会



伊藤証信の遺品

小雑誌『我生活』 わがせいかつ

あるがままに生きること

証信は徳山から明治四十三年（一九一〇）に妻あさ子を伴って上京した。上京後、すぐに発刊したのが『我生活』という八頁の小雑誌である。（七号、約一年で廃刊）

証信はこの雑誌を皮切りに再び無我愛運動を起こそうと考えました。これを読んだある新聞記者が麹町の家を訪れました。その数日後の三面記事に次のような記事が載りました。

「巢鴨の大日堂にたて籠もり、新聞『無我の愛』を出していた名物男、伊藤証信が、徳山で女学校の先生となり、そこであさ子という女性と結婚し、相携えて上京した。一昨日から『我生活』を発刊した。崇拜



「我生活」第1号
(明治43年4月1日発行)

せる人々、花嫁のお姿如何にと押しかけてみると驚いた。まだうら若き花のお顔かと思いきや、年は二十九というに、小じわだらけの中婆さんは先ずよいとして、病気にかかったとあつて、頭はマルハゲなので、誰もあいた口がふさがらず、あれはハナ嫁ではなく、ハゲ嫁だと言っているとか……」

あさ子は五歳のときに病気で髪の毛が抜けてしまったのです。記事を読んだあさ子は、夫にまで恥をかかせてしまつて気の毒だと憤慨しました。

ところが証信は、「それも宣伝になつてよからう。人間、触れられたくないことや、秘密にしておきたいことはあると思うが、昔から私は、あるがままに生きることが、楽に生きられる道だと思つてきた。『我生活』の目的は、自分の生活をありのままに世間に公表し、それに対する反応を世間から得ることなのだ。言ってみれば、

私と世間とが交換日記をするようなものだ」と、平然と言つてのけました。

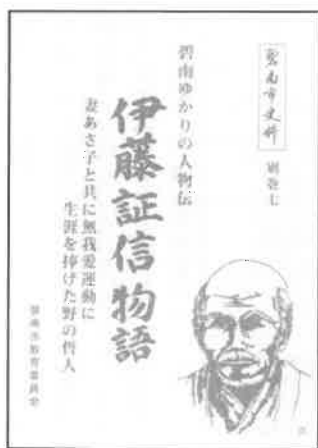
あさ子は自分の未熟さを反省し、自分もこのことを『我生活』に書きました。

その後、各方面からの反響がたくさんありました。あさ子は、証信の言葉によつて、ありのままの姿を世間に知つて貰つたことで、世の中が広々とし、身が軽くなつたように感じられるようになりまし。このように証信の広い懐に抱かれながら、あさ子は人間としての道の修養に努めていったのです。

碧南市市史資料室調査員

浅井 久夫

伊藤証信物語



『伊藤証信物語』は平成二十四年に碧南市教育委員会（碧南市史料別巻七・浅井久夫著）から発刊されました。同書は碧南市藤井達吉現代美術館で販売（三五〇円）されていますが、無我苑でも購入することができます。

古代ギリシア人の「ホドス」

久野 昭

（国際日本文化研究センター名誉教授、
広島大学名誉教授、哲学たいけん村無我苑顧問）

人の歩むべき道を、古代ギリシア人は、ホドス（hodos）と呼んだ。無論、ある特定の方向への通路の意味と、人として当然歩むべき道の意味との、二重の意味を含めてである。

「ホドス」（road, street）という言葉には、時代によつて、発音の相違があるが、それは、ここでは問題にはしない。それよりも重要なのは、古代人が、hodos（ホドス）という言葉に寄せた思いであろう。

それは、たんなる道ではない。古代ギリシア語で、hiera hodos（ヒエラ・ホドス）という言葉があるが、この言葉は、それと同じように、「極めて神聖な道」を意味している。

この「ヒエラ・ホドス」という言葉は、そのようなものの終わることのあり得ないこと、永遠性への憧れを込めて使われてきた表現だったのである。